

はここから生じている。

しかしながら、西田においては絶対と相対はあくまでも絶対矛盾的自己同一的關係あるいは逆対応的關係にあるのであって、両者は一体不二なるものとは考えられていない。少なくとも、そうした要素は希薄である。相対の行為の一方が絶対的なものや永遠なものに触れているということはいわれているが、相対が絶対であり永遠であるとははいわれていない。けれども、西田の考えを徹底させれば、自己と絶対無はただ逆対応的に接しているのではなく、端的に自己が絶対無であり、絶対無が自己であるといわなければならないのではなからうか。それが「絶対無の自覚」の本来の意味であらう。

しかるに、西田哲学における「絶対無」はどこか絶対到自己的であると同時に絶対到他者的であるという要素を含んでいる。それは「絶対矛盾的自己同一」や「逆対応」の論理を見れば明白であらう。この点で、西田の絶対無の概念はまだ不徹底であるともいえるが、しかし逆にそのことがキリスト教や浄土真宗における人格的・超越的な神(仏)をも排除することなく、その思想の内に包摂し得る無限の包容性の要因となつていてもいえるであらう。

西田の宗教思想とキリスト教的終末論

浅見 洋

本発題では終末論理解に言及することによつて、後期西田哲学における宗教論の特徴とその現代キリスト教神学における可能性に論究する。

宗教論には《絶対的一者の自己否定的肯定として、我々の自己が成立するのである。故に我々の自己は、自己否定に於て自己を有つ。我々は何処までも宗教的である。而して又此故に我々の行動の一方が歴史的であり、絶対現在の自己限定として終末論的 (eschatologisch) と云ふことができるのである》(⑩三五四)とある。そのように我々の自己が絶対現在の自己限定として成立し、行為の瞬間において永遠に接しているという事態を西田は終末論的と呼ぶ。絶対現在とは無限の過去と無限の未来を自己矛盾的に含む現在であり、キルケゴールが永遠の今と呼ぶ瞬間 (Augenblick) に他ならない。神学史において絶対現在の自己限定を終末論的と呼ぶようになったのはバルト『ローマ書』以降である。両者の終末論は絶対現在の自己限定、ないしは絶対者と歴史的世界の弁証法的關係を終末となすがゆえに《現在の終末論》と規定できる。また、終末を絶対者と自己の出会い、自己覚醒の場とみなすという点で、終末論の脱黙示文学化、実存的理解が遂行されたともいえる。また、西田は《私の終末論的》と云ふのは、キリスト教のそれと異なつて

パネル

居る。対象的超越的方向に考へられたものではなくして、絶対現在の自己限定として内在的超越の方向に考へられたものである》(⑩三五五)と記し、《新しいキリスト教的世界は、内在的超越のキリストによつて開かれるかもしれない》(⑩三六五)と語った。

三木清は《西田哲学は現在が現在を限定する永遠の今の自己限定の立場から考へられてをり、そのために実践的な時間性の立場、従つて過程的弁証法の意味が弱められてはゐるはしないかと思ふ。…それは畢竟『和解の論理』となり、そこでは Entweder-oder という実践の契機が失われはしないか》という疑念を呈し、そこに欠如しているのは《未来の見地である》と評した。また、バルトは『教会教義学』で《私は来るべき王国の彼岸性については確かに真剣ではあつたが、その王国と来臨そのものについては、あえて全く真剣ではなかつた》と記した。こうした後期バルトの反省の延長線上に、六〇年代以降再び未来的終末論が語られ始めた。モルトマンは《超時間的理解においては、神の真理が、終末の概念に關しても啓示の概念に關しても、約束された未来の黙示としてではなく永遠の現在として受け取られたということである。…神の言葉は永遠の現在の不毛な自己証明ではなく、なお来たらぬものの約束として未来を開き保証するであらう。その時、約束における啓示を通して、前に向う歴史の開放性の新しい認識が生じるのである》と記している。神学の第三世代が《希望の神学》や《歴史の神学》を企てた時、彼らが意図したものは弁証法神学に混在しているヘレニステックなものの排除とヘブライ的思惟への回帰で

あつた。弁証法神学の啓示理解には啓示を永遠的現在の顯現とするバルメニデス的な把握が垣間見えるがゆえに、モルトマンは弁証法神学のロゴス、顯現といったギリシア的カテゴリーを、希望、約束といったヘブライ的なカテゴリーに取り代えようとした。

西田にとつて終末論の未来的構造は対象論理的かつ過程的である。しかし、パネンベルクが「我々の出発点は神自身によつてもたらされる終末論的未来としての神の国である。この未来の光の中でのみ我々は人間とその歴史を理解することができ」と語るように、将来する「神の国」は依然としてヘブライ的な思惟の出発点である。そうした点で『ローマ書』の神が人間学的残滓を残していたように、西田の神も現代キリスト教神学にとつては哲学者の神であり、内在的超越のキリスト教は神学史の傍流であり続けている。

西田哲学と禅仏教

井上 克人

明治三〇年代、彼は憑かれたように坐禅に打ち込んでいた。しかしその一方で、彼に学問への思いが根強くあつたことは無視できない。「余は禅を学の為になすは誤なり。余が心の為め、生命の為になすべし。見性までは宗教や哲学の事を考えず」と自ら戒めているが、それは逆に、それだけ一層、形而上学への